大学新入生の大学適応感に及ぼす精神的健康度の影響

榎本光邦

(群馬パース大学教養共通教育部)

キーワード: 大学適応感, 大学生生活要因

Influence of the mental health degree on freshmen's feelings of university adaptation.

ENOMOTO Mitsukuni

(Gunma PAZ University)

Key Words: feelings of university adaptation, UPI-RS, mental health degree

【 目 的 】

現在, わが国では大学入学者の8~10%程度が中退している。2012年に文部科学省が大学中退に関する初めての全国調査を行い, 中退防止策を検討する方針を発表するなど, 大学中退問題への対応は大学教育における喫緊の課題の一つであると考えられる。大久保(2005)は, 大学中退に影響を及ぼす要因の一つとして学生の「学校適応感(所属大学という環境において, 何となく上手くやっていけそうだという感覚)」を挙げており, 大学1年次において学校適応感を形成することが, 大学4年次に適応感を持つことができていることと関係があることを明らかにしている。本研究では, 大学新入生を対象とし, 学校適応感とその形成に影響を及ぼすと考えられる精神的健康度との関係を明らかにすることで, 新入生の学校適応感の増進を促す支援方法を構築する一助とし, 中退の危機が生じることを未然に防止することにつながることを目的とする。

【 方 法 】

被験者: 関東圏内の私立大学の大学新入生 219 名 (男子 64 名, 女子 155 名)

質問紙の構成: 質問紙は (a) 青年用学校適応感尺度 30 項目 (大久保, 2005), (b) 学生精神的健康調査改訂版 (UPI-RS) 60 項目 (高橋・小林, 2004) を用いた。

手続き: 新入生が大学入学後から2か月程度経過した時点で, 講義終了後の休み時間に質問紙を一斉配布し, 回答を求めた。なお, 本研究は著者が所属する大学の研究倫理委員会の承認を得て行った。

分析方法: (a) および (b) に対して, 因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行い, (a) について抽出された各因子を従属変数, (b) について抽出された各因子を独立変数とし, それぞれ重回帰分析(ステップワイズ法)を行う。

【 結 果 】

因子構造

(a) の 30 項目について, 最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値と累積%から5因子解を採用し, 同様の因子分析を行った。全ての因子に関する因子負荷量が.40未満であった項目を除外し, 同様の因子分析を行い, 第一因子は「居心地の良さの感覚」, 第二因子は「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」, 第三因子は「周囲に受け入れられている感覚」, 第四因子は「課題や目的の存在」, 第五因子は「劣等感の低さ」と命名した。

(b) の 60 項目について, 最尤法による因子分析(プロマックス回転)を行った。固有値と累積%から6因子解を採用し, 同様の因子分析を行った。全ての因子に関する因子負荷量が.40未満であった項目を除外し, 同様の因子分析を行い, 第一因子は「不安感」, 第二因子は「易怒性」, 第三因子は「非快活性」, 第四因子は「不安症・神経症傾向」, 第五因子は「心身症傾向」, 第六因子は「易緊張性」と命名した。

重回帰分析

(a) の各因子の得点を従属変数, (b) の各因子の得点を独立変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。「居心地の良さの感覚」に対しては「非快活性 ($\beta = -.497, p < .001$)」「易怒性 ($\beta = -.200, p < .001$)」が, 「周囲に信頼され, 必要とされている感覚」に対しては「非快活性 ($\beta = -.486, p < .001$)」「易怒性 ($\beta = -.143, p < .05$)」が, 「周囲に受け入れられている感覚」に対しては「非快活性 ($\beta = -.475, p < .001$)」が, 「課題や目的の存在」に対しては「不安感 ($\beta = .314, p < .001$)」「非快活性 ($\beta = .224, p < .001$)」「易緊張性 ($\beta = .141, p < .05$)」「易怒性 ($\beta = .135, p < .05$)」が, 「劣等感の低さ」に対しては「非快活性 ($\beta = -.563, p < .001$)」「易怒性 ($\beta = -.132, p < .05$)」が独立変数として投入された。

【 考 察 】

大学新入生の「非快活性」が, 新入生が抱く大学適応感の5つの因子全てに, 同様に, 「易怒性」は大学適応感の「周囲に受け入れられている感覚」を除く4因子に対して影響を及ぼしており, 大学新入生の大学への適応を表す指標であると考えられる。その一方で, 「不安症・神経症傾向」「心身症傾向」はステップワイズ法による重回帰分析を行ったところ, 全てのケースにおいて独立変数から除外され, 大学新入生の大学への適応を表す指標とはならないと考えられる。以上のことから, 大学入学直後の新入生が大学に適応していくためには, 快活であることと怒りっぽくないことが求められると考えられる。

また, 「課題や目的の存在」という学校適応感に対しては, 他の適応感で見られなかった「不安感」「易緊張性」が独立変数として投入されていた。このことから, 大学新入生が課題や目的を持つ際には, 少なからず不安感を抱き, 緊張した状態になると考えられる。

今後の課題として, 大学入学から更に時間が経過した時点で同様の調査を行い, 大学適応感の変化やその時点で必要な支援について検討したい。

【 引用・参考文献 】

文部科学省 2014 学生の中退退学や休学等の状況について報道発表。

大久保智生 2005 生年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53, 307-319。

大久保智生, 川田学, 江村早紀, 折田祐希 2010 大学新入生の自律的進学同期が大学生活への適応に及ぼす影響 香川大学研究紀要, 7, 71-87。

高橋知音, 小林正信 2004 4段階評定による新UPIの開発 - 信頼性, 妥当性の検討と下位尺度の構成 - Campus Health 41, 2, 69-74。